

半歩⁺未来⁺を考える教育オピニオン

「アグリマイスター顕彰制度」で 変わる農業高校教育

東京都立園芸高校統括校長

埼玉県立熊谷農業高校校長

東京都立瑞穂農芸高校校長

徳田安伸

竹本政弘

小堀紀明

2015年度、全国の農業系学科などに在籍する生徒の日頃の学習の成果や、資格の取得、技術・技能検定の合格などの実績を点数化し、「アグリマイスター」として認定する「アグリマイスター顕彰制度」がスタートした。

その創設において中心的な役割を担った3人の校長に、制度の狙いや特色、今後の展開などを聞いた。

農業高校の教育の質を保証し 分かりやすく社会に提示する

徳田 「アグリマイスター顕彰制度」（以下、本制度）創設のきっかけは、教育再生実行会議が提言した「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」にあります。提言の中で、生徒の学習成果を多面的に評価する方策の一例として、工業系学科・工業高校で

実施されている「ジュニアマイスター顕彰制度」が挙げられていました。改めて考えると、商業系学科・商業高校でも、資格取得のための支援が充実しています。ところが、農業系学科・農業高校には、そうした仕組みがありませんでした。社会で求められる力が変化し、更に大学入試改革も進む中、農業高校の教育の質を保証し、分かりやすく社会に提示できる制度が必要だと考えたのです。

「アグリマイスター顕彰制度」の狙いと内容

◎教育再生実行会議は、2013年、「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」（第四次提言）を提出。高校教育の質の確保・向上の方策の1つとして、職業分野の資格などを活用し、生徒の多面的な学習成果を評価し、進学や就職に生かすための仕組みを充実するよう求めた。それを受けて、全国農業高等学校長協会は、15年4月、生徒が身に付けた様々な知識・技術・技能を総合的に評価する「アグリマイスター顕彰制度」を創設した。全国各地で開かれる競技会・コンクール、各種資格や検定などを、「農業関連（全国規模）」、「一般教養・基礎力を測るもの（全国規模）」、「それ以外」の3つに区分し、重み付けをして点数化。合計点に応じて、「アグリマイスターシルバー」「アグリマイスターゴールド」「アグリマイスタープラチナ」の称号を授与する。合計点のうち3分の2以上は農業に関するものであることと規定した。称号の認定は、毎年8月と2月に実施。更に、アグリマイスターゴールド以上の取得者、及び指導に成果があった学校の中から、特に優秀な生徒及び高校を、毎年2月に特別表彰する。

PROFILE



東京都立園芸高校統括校長

徳田安伸

とくだ・やすのぶ

◎教職歴 35 年。同校に赴任して3年目。東京都立総ヶ丘高校統括校長等を経て現職。全国農業高等学校長協会理事長。

埼玉県立熊谷農業高校校長

竹本政弘

たけもと・まさひろ

◎教職歴 34 年。同校に赴任して2年目。埼玉県立川越総合高校校長等を経て現職。全国農業高等学校長協会副理事長。



東京都立瑞穂農芸高校校長

小堀紀明

こほり・のりあき

◎教職歴 32 年。同校に赴任して3年目。東京都立農産高校副校長等を経て現職。全国農業高等学校長協会副理事長。



竹本 農業高校には、農業、園芸、畜産など、多様な学科があり、生徒の学習の目的や意欲は様々です。中には、入学後、専門的な学習への意欲を持ちにくくなる生徒もいます。生徒が目標に向かって学習に意欲的に取り組むようにするには、どうすればよいのかという課題もありました。本制度によって、生徒が資格取得や競技会出場に積極的になり、専門教科を学ぶ目的意識を高めてほしいという思いもあります。

生徒の日頃の学習を適切に評価し、更に進路にも活用できる制度とするために、どのような資格や検定、活動を顕彰の対象とし、取得した級や段、獲得した成績を重み付けして評価するかということでした。

農業高校関係者などにヒアリングしたところ、「アグリマイスター」であるならば、農業に関する知識・技術・技能だけを評価すればよいのではないかとという意見が多数ありました。ただ、現代の知識基盤社会を生きていくために

は、基礎学力や一般教養もしつかり身に付ける必要がありますし、そもそも農業は応用学問ですから、基礎学力なくして、農業の専門知識や技術を身に付けることは出来ません。また、進学や就職に生かせる制度とするためには、農業の知識・技術だけでなく、基礎学力や一般教養も十分身に付けている生徒に称号を与えているということも、社会に示す必要もありました。

そこで、「アグリマイスターシルバー」(30点以上45点未満)、「アグリマイスターゴールド」(45点以上60点未満)、「アグリマイスタープラチナ」(60点以上)のどの称号においても、全得点の3分の2は農業関連での得点、3分の1は学習指導要領で求められている学力を保証する資格や検定などでの得点とし、双方の力が身に付いていることを保証する制度としました。

竹本 得点の対象となる競技会やコンクール、資格・検定は、「農業関連(全国規模)」「一般教養・基礎力を測るもの(全国規模)」「それ以外」の3つに区分しました(P.46図)。更に、成績や級・段に応じて、S(30点)〜F(1点)の得点に換算し、その合計点により、称号の認定を行います。

農業高校には、約9万人の生徒が在籍しています。そのうち「アグリマイスタープラチナ」の取得が見込まれるのは、100人程度です。決して簡単に取得できる称号ではありませんが、普段の学習の積み重ねがこの称号につなが

ることをしっかり認識して、頑張つてほしいと思います。

プロジェクト学習で培った 汎用的能力も評価する制度に

徳田 生徒の学校での日頃の頑張りを評価に含めることは、戦後、農業高校での教育の核を担ってきた「日本学校農業クラブ連盟（FFJ）」での成果を得点化させることで実現しました。

FFJは、農業高校の生徒による自発的・自主的な組織です。その活動は、学習指導要領にも位置付けられ、授業にも組み込まれています。活動の柱は、生徒自らが農業に関する研究テーマを決めて、個人やチームで研究を進める「プロジェクト学習」です。それらの学習は、今まさに高校教育で充実が求められているアクティブ・ラーニングであり、それを農業高校では既に何十年にもわたって行ってきたのです。

活動の成果を発表する場としては、まず校内での発表大会があります。校内大会、県大会、ブロック大会を勝ち抜いた個人・チームは、全国大会に進んでいきます。大会には、農業鑑定競技会、農業プロジェクト発表会、農業意見発表会など様々なジャンルがあります。

小堀 FFJでの活動の成果は、これまで「科学性」「社会性」「指導性」の3つの項目で評価するFFJ検定（初級、中級、上級、特級の4段階）で評価してきました。

本制度では、FFJ検定に加え、農業プロジェクト発表会、農業意見発表会などでの成績を点数化して組み込んでいます。つまり、課題発見・解決力、探究力、リーダーシップ、コミュニケーション力などの汎用的な能力を有していることを、本制度によって保証しているのです。

竹本 農業高校で行われる実習は、グループでの作業も多く、協働学習も多く取り入れられています。また、生き物を扱うことから、長期休業中にも水やりや餌やりの当番が必ずあり、思いやりの心や責任感が育まれていきます。

汎用的な能力は、これまでの大学入試では十分に測ることが出来ていないと思います。しかし、アグリマイスターの称号を持つ生徒には、そうした能力があることを保証できます。本制度により、農業高校の生徒の進路が大きく開けるものと期待しています。

地域に密着した農業高校の活動が 地方創生の一端を担っていく

徳田 昨今、地方創生が盛んにいわれていますが、私は農業高校の生徒が地方創生の鍵になると考えています。農業高校では、「地域の資源を活用して産業を興す」という地元密着型の教育を行っています。高校の学習を通して、地域の課題に取り組んできた生徒はごく自然に地域への課題意識を持ち、多くの生徒が地元企業や団体に就職します。高校時代から地域に根差

図 アグリマイスター顕彰制度 区分例（抜粋）

- 区分A（農業関連）
FFJ検定、農業プロジェクト発表会、家畜審査競技会、農業情報処理競技会、日本農業技術検定、実験動物2級技術者など
- 区分B（一般教養・基礎力を測るもの）
日本学生科学賞、実用数学技能検定、全国高校生クリエイティブコンテスト、ICTプロフィエーション検定（P検）、簿記検定試験、語彙・読解力検定、秘書検定など
- 区分C（A・B以外）
GTEC for STUDENTS、ビジネス実務マナー検定など

*全国農業高等学校長協会の資料から抜粋。詳しくは下記サイトを参照。
<http://www.zennokocyokai.org/>

してきた生徒が地域で活躍していくことが、地方創生につながるのではないのでしょうか。

実際、農業高校が中心となり、生産した商品を海外や大都市圏で販売したり、生産物を加工して付加価値を付けて販売したりして、地域の活性化に寄与しているというケースが増えていきます。そのような経験と知識・技術を兼ね備えた質の高い生徒にアグリマイスターの称号を与えることで、生徒が自信と誇りを持って社会に出て行けるようになればと願っています。

竹本 農業高校は、普通科高校と比べて普通科目の単位数が少ないため、どうしても基礎学力の面では課題があると見られる傾向にあります。学び直しや資格取得の支援などをしていかなければならないのは確かであり、本制度がそ



の一助になればと考えています。

一方で、生徒の実践力は高いと感じています。農業高校では、生産技術の向上はもちろんのこと、加工や流通についても学べるようになっていきます。例えば、栽培したトマトを加工業者に出荷し、キムチに加工した上で大手デパートで高価格で販売したり、スイカを海外に売り出したりといった試みを成功させている高校があります。単に作るだけでなく、ビジネスとしての成功という観点でも実践的に学んでいるのです。そうした実践は、活躍の幅を広げると共に、

農業の技術だけでなく、一般教養なども重要であることを実感する場にもなっています。

社会の中で、生産から販売まで一貫して手掛ける経験をしたり、その過程で地域の人たちとの交流を経験したりすることで、学びの幅が広がり、学習意欲を高めていく生徒は大勢います。FFJの活動や毎日の実習、幅広い体験型の授業など、農業高校には生徒の主体的な学びを後押しする、様々な仕組みがあるのです。

農業高校の生徒は、引っ込み思案で、最初は受け身の生徒も多いのですが、教師が少し声を掛け、進む方向を示すことで、行動を起こし、そこで達成感を得て、次のステップへと進んでいきます。伸びしろは非常に大きいですし、本制度をうまく活用できれば、生徒の意欲を更に高めていけると考えています。

小堀 本制度には、一定の成果を上げた高校への表彰制度もあります。これは、生徒の資格取得の指導に力を入れている先生方への評価にもつながり、学校全体の活力を高めることにも役立つのではないかと考えています。

称号を得た生徒が社会で活躍する それが制度浸透の鍵

徳田 本制度は今年度が始まったばかりで、まだ課題もあります。現在、農業系の学部・学科を持つ大学に本制度の説明を行い、入試への活用を依頼している状況です。趣旨に賛同し、ゴー

ルドやプラチナのアグリマイスターを持つ生徒に対して、入学金の免除や授業料の減免といった優遇措置を検討している大学もあります。少子化が進む中、大学も質の高い学生をどのように確保するかが最大の課題です。全国農業高等学校長協会が本制度で生徒の質を保証することで、大学にとっても質の高い生徒を受け入れやすくなるというメリットがあると思います。

小堀 得点の対象となる資格や検定、コンクールなどを精査していくことも課題です。検定やコンクールは、全国的に認知されているものから、地域独自に実施しているものまで、多種多様です。それらを重み付けして点数化するのが難しく、今後の申請状況などを見ながら、現状の区分を見直していこうと考えています。また、全国の農業高校に通知し、FFJを通して生徒への浸透を図っていますが、本制度自体の認知もまだまだこれからです。アグリマイスターを取得することが農業教育のスタンダードとなるように、試行錯誤を重ねながら本制度を普及させていきたいと思っています。

徳田 何よりも、アグリマイスターの称号を得た生徒が社会で活躍してくれることが、この制度を社会に浸透させるためには不可欠です。本制度で農業教育を変える！ そのような気概で、制度をより活用範囲の広いものにしていくのと同時に、生徒たちを全力で支援していきたいと思います。